



## パンダちゃんの入学手続き

「ぼくのお名前はなに?」「パンダちゃーん!」これがパンダちゃんと交わした最初の会話だ。あっ、そうか中国から来たからパンダちゃんなんだ、と思った。どうやらテレビを見ながら片言の日本語を覚えたらしい。満面の笑顔のその男の子はポケモンのTシャツにウルトラマンの靴を履き、しっかりとお母さんの手を握りながら上を見上げていた。お父さんはニコニコとしながら本当の名前を口にしてくれたが、私には発音が難しく、うまく呼べなかった。それから私はその6歳の男の子をパンダちゃんと呼ぶようになる。

この日はお父さんが、留学していた東京の大学を卒業し、はるばる埼玉から電車や新幹線を乗り継いでATRの最寄り駅がある京都と奈良の県境に来た日だった。四月からここで研究員として働くことになり、その数日前に到着したのだ。三月下旬のよい天気の中、社宅まで一家三人と手荷物をゴロゴロと引きながら歩いた。お父さんの一番の心配はパンダちゃんの学校のことだ。社宅に到着するまでに自然と小学校の話になった。「いまからでも入学式に間に合いますか?」「大丈夫ですよ。こちらの教育委員会に連絡してありますから。明日、さっそく手続きに行きましょう」お父さんはまたニコッとした。引いている荷物が少し軽くなったように見えた。

翌日、家族三人と駅で待ち合わせをする。駅前のバスターミナルから一日数本しかないバスに乗り、教育委員会に向かう。30分くらいの道のりなのだが、子供には長い時間だ。一つ二つバス停を過ぎてパンダちゃんは降車する人が押しているものに興味を持ったようだ。そして間もなく、エイッとボタンを押した。「ピンポン!」「すみません! 間違えました!」と焦った私が大きな声を出す。「はい」と運転手さん。一息ついて思った。こんな活発なパンダちゃんなら、学校でもすぐにお友達ができるだろう。

目的のバス停で降りると、まずは近くの役場で外国人登録証明書の住所変更を済ませ、それから教育委員会に向かった。カウンターで就学届けを記入し、健康診断書を手渡す。すぐに担当者は校区を調べ、小学校に電話をしてくれた。「明日、学校で教頭先生と面談して下さいね」と言いながら地図を渡してくれた。感謝、感謝。

次の日、今度は小学校に向かった。なぜかパンダちゃんはお母さんの手をぐいぐいと引っ張ってお父さんと私の前を歩いていた。あれ? なんで道を知っているんだろう? そういう顔をした私にお父さんは言った。「昨日うれしくて、うれしくて、先に学校を見に行っちゃったんです!」そう聞くと私も俄然気合いが入る。よし、しっかりとパンダちゃんを紹介するぞ。

学校に入るとさすがのみんなも少し緊張していた。教頭先生や他の先生方は入学手続きの説明を丁寧にしてくれた。給食の時に必要なナプキンのサイズや、体操着袋を机の横につるした時に床に付かない紐の長さ等、通訳する内容は多岐にわたる。私が英訳すると、お父さんが中国語に直してお母さんに一生懸命説明する。お母さんはそのつど深くうなずく。二時間ほどで面談が終了、あとは家族三人で入学式に行ってもらおうとパンダちゃんは立派な一年生になる。「入学式では校長先生がお名前を呼びますから、大きな声で返事ができるようにしておいて下さいね」と教頭先生は言った。帰り道、パンダちゃんの「ハイ!」の声が団地にこだました。



こんな具合にSHIENのサポートは行われている。家族が新しい環境にいち早く慣れ、安心して生活できることにより、研究員が仕事に専念できるようにすることが目的だ。今回は入学手続きの紹介をしたが、一般的に企業内業務と家族に関する事柄は切り離すべき、と思われる人も少なくないだろう。しかし、実際にはそんなことを言っているのは世界の優秀な人材を集めることはできない。なぜなら家族を大切にする気持ちは万国共通だからである。

SHIEN 三神 恵